

# 琉球大学学術リポジトリ

身につけたい「資質・能力」を明示化し、自覚しながら進めていく国語科学習の工夫

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教職センター 公開日: 2021-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上田, 達大, 下地, 成子, 下地, 美保代, 仲間, 章子, 上地, 洋平, 本村, 俊貴, Ueda, Tatsuhiko, Shimoji, Nariko, Shimoji, Mihoyo, Nakama, Swhouko, Uechi, Youhei, Motomura, Toshiki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/48018">http://hdl.handle.net/20.500.12000/48018</a>

## 身につけたい「資質・能力」を明示化し、自覚しながら進めていく国語科学習の工夫

上田達大 下地成子 下地美保代 仲間章子 上地洋平 本村俊貴

### 1 はじめに

「国語の授業は難しい。」という声をよく聞く。物語文や説明文において、その内容を理解していくことだけに注意が注がれているわけではないと思うが、算数や社会に比べて「指導事項」が2年括りで抽象的であるため、学習後に以降の単元等で活用するといったことがなかなか自覚されていない。結果的に、教師もどう体系性を意識して学習を作ればいいのか明確でないことが懸念される。毎日使っている日本語そのものを対象にすることもあり、子どもたちにとっても、自覚的に明示的に現在の国語での学びを他の文章を読む文脈においても活用できるといった構えで学習されていないのではないだろうか。

そこで、子どもが学習時に、国語における「資質・能力」を自覚し、読み方への問題意識を持ち、主体的に学習に参加して行ける国語科の学習の在り方を研究する。

### 2 学習の転移

奈須(2017)は、「ある知識が自在に活用されるには、どのような問題場面にどのような理由で適用可能なのか、適用条件は何で、どのような変換を施す必要があるかまで伴っている必要があること」を述べている。さらに知識は単に所有すればいいのではなく、その質が決定的に重要であることと学習の転移がそうそう起こらないことを指摘している。また、「人間の知性や学習というのは、それくらい領域固有なものであり、文脈や状況に強く依存している」と述べている。さらに、「経験や学習を科学的な概念や方法論の視点から自覚的に振り返って比較・統合し、さらに道具化して、いつでも自らの意思で自在に操れるようになるまでの段階的で明示的な指導を、教師からは受けていないことが大きい。」とも述べている。ある学びの文脈に沿って学んで得た読みの力を前景化、明示化し、毎時間の読みの際に自覚的に活用していくことや自分の読みたい本にそれを適用させることで感想をよりよく伝えることを経験させたりすることを目指す単元の展開を本研究では意識していく。

### 3 本研究における内容と検証

本研究においては、以下の3点において、実践の方向性を設定し、その方向性による授業実践時の授業の様子と授業を実践した教諭の観察において、子どもの学びの様子を検証する。

- (1) 「身に付けたい」力の自覚化から単元計画へ
- (2) 毎時間の学習課題の設定のあり方と見通しの工夫
- (3) 本単元につなげるためのこれまでの学習の価値の整理

### 4 国語科で「身に付けたい力（資質・能力）を自覚した授業に向けて

#### (1) 「身に付けたい力」を前景化した単元の流れ

子どもにとって、国語は何を学んでいるのかわかりにくい。だから、教材内容理解のみで見えなくなならないよう、国語で「身に付けたい力（資質・能力）」を自覚的に授業の中心に据えていく試みを行う。結果的に、今日の学習でどんな力を発揮させるかを前景化させる試みとなる。

単元全体の流れとして、これまでの学習を通して、子どもたちにとって「身に付けた力」はどんなものだったのかを「物語を読む上での価値」の視点で整理する。そして、子ども達自身で、物語を読む自分たちの力を自己評価しながら、次の学習で目指す「身に付けたい力」を提案、設定させていく。子ども達が自分たちで目指す「身に付けたい力」（資質・能力）を掲げているので、どうやって学習を進めていくかの計画も子どもと共有し見通しを持たせていく。そうすることで、子ども達の中に「学びの文脈」「必然性」「学ぶ意義」が生じることだろう。単元の終末には、読みの際に発揮できる「身に付けた力」を用いて、同作者の他の作品を読んで・・・・・・を作成して紹介するという「単元の核となる言語活動」を設定する。

## （2）毎時間の学習課題と見通しの工夫

国語の授業では、文学的な教材の学習過程で学習課題を設定する際に「ごんは、兵十と分かり合えたか」「大造じいさんの心は、どう変化したか」等、「内容の読み取り」を前面に出すことが多い。当然その中で読み方を発見していくのであるが、本単元においては、その「読み方」を前面に出し、国語で身に付ける力をより明確に意識させる。提案として「・・・・読むには、どこに目をつけて読めばいいか」と学習課題を設定し、まとめでは「・・・・読む際には、・・・・を比較してみるとわかってくる。」とより汎用的に活用できる形でまとめ、他の本ではそれを使ってどんな読み方ができるかと言った見通しを持たせることができる。つまり導入時に問題として「ごんの兵十に対する気持ちは、どう変わっていったのか」と投げかける。そこで、子供たちは、それを探るのにどのような方法でアプローチをするかを考える。全体の学習課題として「ごんの兵十に対する気持ちは変化を読むためにどこに着目して読めばいいのか？」として学習を進める。内容の解釈を進めながら、学習問題に対する答えを導き出す。そして自分たちの行ってきた学習過程を振り返り「・・・・に着目することで登場人物の心情の変化を読み取れる。」といったまとめ方を単元全時で徹底していく。そうすることで、内容理解の影に隠れ、自覚化しにくかった「読み方」「読みの視点」等を子ども達に意識させていく。このようなことが子どもたちによる「言葉による見方・考え方」を促すものと考えられる。

## （3）既習教材と「身につけてきた力」の自覚（次の単元でどのような力をつけたいか）

「読むこと」において、1学期に行った全ての文学的な文章の単元「白いぼうし」「一つの花」の価値付けを行う必要がある。そうすることによって、まだ不十分な力、次に付けたい力を児童が意識することででき、次の単元での目的が明確になると考える。

A「白いぼうし」については、

①「登場人物の人柄のとらえ方」を学んでいる。

しかし、その学びを子ども達にとって自覚的に明示的にするために、そのとらえ方として「会話文」「地の文」の中から「行動描写」「外見描写」「言動・思考の描写」「直接的な性格・人柄の表現」等があることを、これまでの学びを振り返り不十分だと判断した場合は、再確認していく。

また、

- ・人柄を捉え、その人物が物語でどのような役割をしているのかを考えながら読むとよいこと
- ・特に中心人物の人柄等を捉えて読むことは、展開や山場を読む上で大きな意味を持つこと。

導入における「人物」は、事件が展開し始める大切な仕掛けである。

といった、登場人物の設定をしっかり把握することの価値を子ども達が理解することが大事である。

②表現に着目して読むこと（比喩、五感の表現、色彩語等）

- ・文章中に使用されている表現の中で、「比喩」「五感の表現」「色彩語」等がそれぞれのどのような効果をもたらしているかを考えながら読むこと。特に「色彩語」については、それが別の色で合ったらどう感じるか、なぜ作者がその色を選んでいるかを考えて読むことの価値を再確認する。そうすることで、言葉にこだわって読むことの大切さを自覚し、他の物語に生かすことができる。

B「一つの花」については、

①「場面」の移り変わりと「人物の気持ちや行動・まわりの様子・出来事」を整理して読むことで、人物の心情の変化やその要因等を具体的に考えることができる。

\*括弧は平成29年学習指導要領から抜粋

「登場人物の気持ちの変化について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像するとは、場面の移り変わりとともに描かれる登場人物の気持ちが、どのように変化しているのかを具体的に思い描くことである。登場人物の気持ちは、場面の移り変わりの中で揺れ動いて描かれることが多い。そのため、複数の場面の叙述を結び付けながら、気持ちの変化を見いだして想像していく必要がある。また、どの叙述とどの叙述とを結び付けるかによっても変化やそのきっかけの捉え方が異なり、多様に想像を広げて読むことができる。」

「登場人物の性格は、複数の場面に共通して一貫して描かれる場合と、多面的に描かれる場合とがある。いずれの場合も、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像するためには、それぞれの登場人物の境遇や状況を把握し、物語全体に描かれた行動や会話に関わる複数の叙述を結び付けて読むことが重要である。一つの叙述だけではなく、複数の叙述を根拠にすることで、より具体的に登場人物の性格を思い描くことができる。」

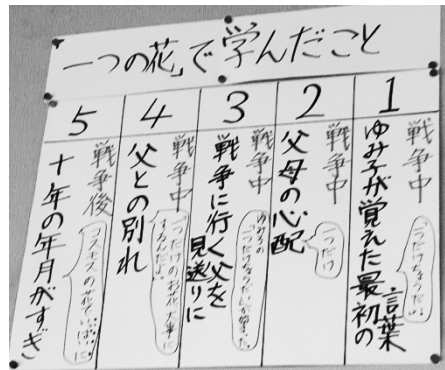
②「鍵」となる特別な言葉等に着目して読むこと。そのような「鍵」となる言葉は、

- ・題名に使用
- ・繰り返し使用
- ・中心となる登場人物の会話に用いられる。
- ・出来事が起こったり解決したり、登場人物の気持ちに変化したりする重要な場面（クライマックス・山場）で用いられる。

また「題名」の持つ働きを既習の教材を用いて整理することも考えられる。

C「言葉のたから箱」や「読みの技」等の活用

4年（上）126ページにある「どんな人物か」「どんなものや事柄か」「気持ち」を表す言葉を学んで活用する場を意識しておく。また、人物の心情のとらえ方や気持ちの変化の捉え方など毎時間で学んだ「読みの技」をどのようにまとめ、活用させていくかも意識していく。



## 5 本単元と身につけさせたい力について

### (1) 単元の構想

本教材「ごんぎつね」を通して「身につけさせたい力」とは何か。そしてどのような文脈の中でその力を意識したり発揮したりできるようにするかといった単元の構想を行う必要がある。そこで、単元のゴール時にめざしている「子どもの姿」を達成できるように、活用したり発揮したりできる視点や思考法、見方などが単元を構成する毎時間の学習を通して、学べる様に工夫していく。

### (2) 単元の終わりに期待したい子どもの姿

この単元を通して、子ども達は文学的な文章を読みながら、どのような事ができるようになっ

ているのか。学習指導要領に示される目標では、「ウ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。」が今回の「身につけさせたい力」に当たる。それは、具体的にどのような子どもの姿か。よって、この単元の終わりには、各自が選択した本（もしくは、学習した教材）を元に下記に示すことができるようにしたい。ちなみに、下記の①②③④【ウ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。】に相当し、⑤⑥は、【エ 目的や必要に応じて、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章などを引用したり要約したりすること。】【オ 文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。】に相当すると考える。

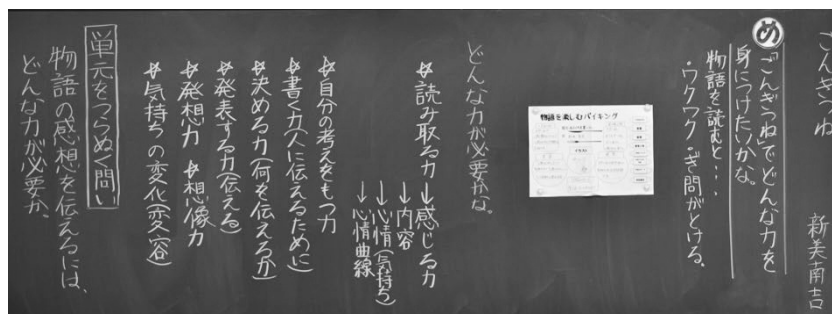
- ①場面構成を元にあらすじをまとめる。
- ②登場人物がどのような人物なのか、叙述を根拠に自分の主張を理由付けと共に述べる。
- ③中心人物の気持ちの変化を物語の始めと終わりを比較しながら、  
（何が・どのように・どうして）変化したのかを読み取る。
- ④お気に入りの表現  
（物語の中で使われている表現技法の良さを根拠を基に伝える。視点や語り手等も含む。）
- ⑤自分の好きな場面として、文章を要約したり引用したりして、中心人物のよさやおもしろさを伝える。
- ⑥テーマ（作品から受けとったメッセージ）を根拠を元に自分の経験等にふれながら伝えることができる。

さらに、このように身についた力を子ども達が自覚できるように単元を終わりたいと考える。この単元では、「物語で感じたことをバイキング形式を使って伝え合う」活動を位置づけた。この活動は、児童が教材以外の新見作品から読み取った事柄をリーフレットにして表現し、それを介して児童同士の感想や考えを伝え合っていくものである。「変容」「感想」「人物紹介」「作者」「お気に入り表現」作品のテーマ」「情景描写」の視点から紹介するために必要な5つの視点（バイキングのお皿）を選択し、リーフレットにまとめる。「物語の感想を伝えるには、どんな力が必要か？」を「単元を貫く問い」として取り組んできた。毎時間、身につけたい力を目ざしてきたことよさやその活用を目指す。

## 6 授業の実際から

ここでは、ごんぎつねの単元から一部の学習の様子を述べる。

4（2）で述べたように、第1時に、これまでの学習を再度振り返り、どのような力を身につけてきたのか、どのような読み方を学んできたのかを子ども達と再整理した。さらに学習計画に子ども達の課題を生かすために子ども達に「疑問に感じたこと、みんなで話し合ってみよう」を書いてもらう。



## 第2時 学習の見通しを持つ

ここでは、「ごんぎつね」を学んでいく中で、どのような力を身につけていきたいかを子ども達に問うた。単元のゴールとして「物語のバイキング」と名付けたカードを書いて友達と紹介し合うことを設定している。これに向けて子供たちからは、最初に「内容」という反応があった。そこで教師がその内容を読むために、どのような力が必要だろうと聞き返した。子ども達からは、

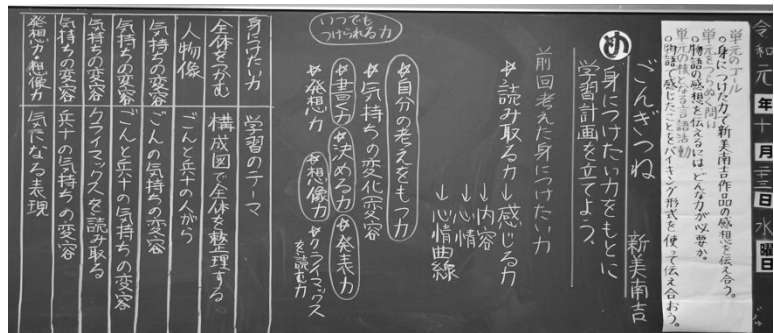
- ・感じ取る力
- ・登場人物の心情を読み取る力（心情曲線を使えるのでは）
- ・自分の考えを持つ力（友達と話し合うために必要）
- ・考えを書く力（人に伝えるために必要ではないか）
- ・決める力（何を書くかと良いのかを判断する）
- ・発想する力（想像力）



といった意見が出た。最後に、この単元を貫いての問いとして「物語の感想を伝えるには、どんな力が必要か？」を全員で追究していくことを確認した。

## 第3時 子供達と学習計画を立てる。

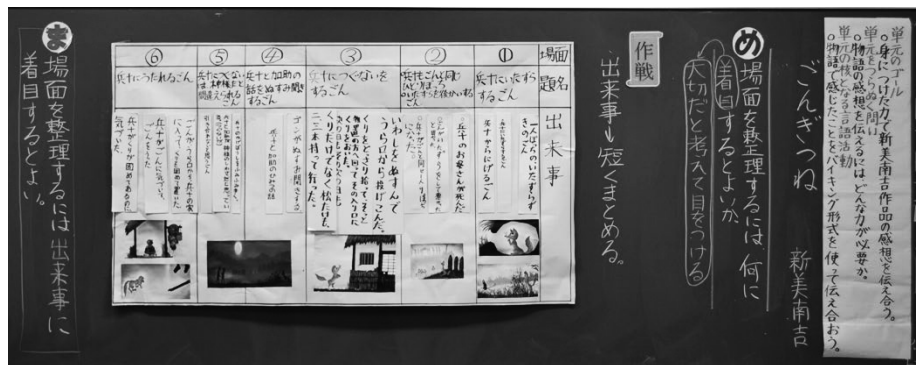
第1時に子供達から出された「身につけたい力」を元に教師と子どもとで「疑問に感じたこと、みんなで話し合いたいこと」や「これまでの既習事項」をも加味しながら学習計画を立てた。「兵十の気持ちの変化を知りたい」「ごんの気持ちについてもっと考えたい」「兵十はどんな人？」



「青いけむりは何？」と言った意見があったので、それを考えることはどんな力になるのかと問い返すことで、学習のテーマだけでなく、子ども達が出した「身につけたい力」とを関連させて計画を立てることができた。このような表を作成することで、内容だけからは見えないより「資質・能力」を自覚した学習の流れを子どもと確認できた。最後に、学習をこのように計画的に考えていくことも「見通す力」を身につけることつながるとまとめた。

## 第4時 場面を整理し全体の流れをとらえる

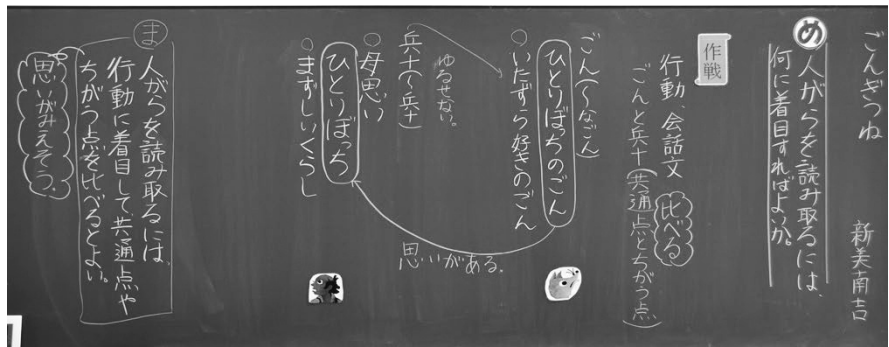
ここでは、「全体をつかむ」力を身につけるために学習課題（めあて）を「場面を整理するには、何に着目するとよいか」で学習を進めた。子供たちからは、『出来事』を順序よく整理してまとめれば良いのでは」という見通しが出たので、その方法で、まとめていくことにした。



「出来事」でまとめるという意見は、既習教材「一つの花」の学びから子どもたちが提案した。グループに6場面を割り当て、各場面の出来事を整理、全体で共有しながら小見出しを「～するごん」とまとめていった。全体を整理するとごんの変化が少し見えてくるよさを価値づけて確認した。これまでの学習を振り返り、「場面を整理するには、出来事に着目すると良い」とまとめた。

第5時 登場人物の人柄を読む

ここでは、「人物像」を捉える力を目指し、子どもたちの疑問である「兵十とごんは、どんな人柄なのか？」を導入に、本時の「身につけたい力」を意識して「人がらを読み取るには何に着目すればよ



いか」を学習課題（めあて）に進めた。子ども達は、解決するために「行動描写」や「会話文」がヒントになるのではと発言した。既習教材の「白いぼうし」から学んだ読み方を活用しようとする動きである。個人で「人がら」が分かる文章表現に線引きし、全体で共有した。出された行動や会話文で2人を「比べ」て「共通点」や「違う点」を見つけていくとよいのではという意見で「共にひとりぼっち」であるという共通点と「母思い、まずしいくらい」な兵十と「いたずら好き」のごんの相違や「兵十がごんに対する思いとごんの兵十に対する思いが反対であること」に気づいていくことができた。ここで子どもたちは、「ひとりぼっち」という共通点から「兵十」に対して「思いがある」ことや「似たもの同士」といった感情があるという発言をしていた。この学習でも子ども達によって

「人がらを読み取るには、行動に着目して共通点やちがう点を比べると良い」とまとめることができた。さらにそうすることで「思いが見えてきそう」と読み方を価値づけることができています。

第6時 人物の変容をとらえる①（②として心情曲線を用いた兵十とごんの心の距離を考える時間も設定しているがここでは割愛）

ごんの心の変容を読み解く作戦として子ども達から既習として「行動を中心に読む」が出てくるのが予想された。本時は、「行動」でもどの



ような行動に注目するかを問うた。どんな行動かの問いに、少し戸惑った様子であった。「つぐない」という意見が出たので、教科書から「つぐない」の場面のみを音読を行なった。そうすることで、つぐないを何度も繰り返していることを確認できた。つぐないの表されている文章を参考に、子ども達は、ごんの気持ちの変容を考えた。「いわしをつかみ出して、もと来た方へ・・・」の文から「うたれるので見つからないように」という意識が強いと主張した。その理由は、「めんどくさそう」「自分になにか起こりそう」「おこられる」という気持ちがうかがえるというものだった。また、「うら口からこっそり中へ」という文から「気づいてほしい」という気持ちになっていると主張した。その理由は、「同じ一人ぼっち」「ごんってわかってほしい」「ありがとうと言ってほしい」という気持ちが窺えるというものであった。子どもたちは、この学習スタイルに慣れてきているようで「ごんの変容はくり返している行動に着目すると良い」とまとめることができた。本時は、4つの文を比較したのだが、子ども達は最初と最後を比較することに終始してしまい、

中の2つの繰り返しにある「入り口」や「松たけも2、3本」といった変化をあまり検討できなかった。「繰り返す」ところを読むと変容が見えてくることを実感させるためにも、中の2つの変化は、もう少し考えさせる必要があったと考える。また「うら口から」の根拠の文をもとにした主張と理由の違いが整理されていない様子も伺えた。6時の実践だけでなく、まとめる際には、教材内容から離れてまとめていく方が良い。「ごんの変容」ではなく、「登場人物の変容」もしくは「中心人物の変容」また、それに着目することでどんなことが見えてくるのかという価値づけも一緒にまとめていく必要があると感じた。

## 7 成果と課題

### (成果)

研究対象学級の担任の観察から（共同研究者：授業者 本村俊貴 教諭）

①子ども達は「身に付けたい力を意識した授業」を通して目指す資質・能力を意識しながら授業に取り組むようになったか。

○単元計画の中で「身につけたい力」を確認しながら授業を進めたので、一時間一時間でも意識して子供たちは、授業に臨んでいた。また、試しに他の教科で「今の時間でどんな力が身につくそう？」と問いかけたら、スムーズに答えて授業に入っていたので、教科に関わらず資質・能力を意識して子供達が学習を見ていることがわかった。常日頃から教師が意識して学習の中で明示化していくことが大切だと感じた。



②子ども達は、単元を通して目的意識を持って学んでいたか。

○研究対象学級児童は、毎時間、目的意識を持って学んでいた。特に単元のゴールを目指して、単元計画を自分達で立て、その計画に沿って授業を進めることで何のために毎時間があるのか自明であり、ゴールを目指して学んでいるのだという意識が高まっていったと考えられる。

また授業においても、毎時間、作戦（どのような視点で解決していくか）を自分達で立てて、見通しを持った形で授業に取り組んでいたこともその意識に繋がったと考える。

③内容だけでなく、「読み方（身につけたい力）」を意識して読む姿が見られたか。

○児童の作品の読み方の意識はかなり変化した。特に「めあて」で作品の読み方に作戦を立て、「まとめ」で作戦が有効であったかどうかを振り返り、「めあて」で問うたものを一般化し、まとめていくことで、ごんぎつねだけでなく、他の作品でもこんな読み方をしたらいいんだと感じながら学んでいる様子が見られた。また、言語活動の「バイキング」も読み方を意識した内容だったので、それも学んだ「読み方」を活用させるよい機会となった。

④「身につけたい」と思っている力を身につけつつあるという自信を持つようになったか。

○単元始めに身につけたい力を計画して、授業始めでも確認していたが、授業の最後や単元終わりさらに教師が、「身につけたい」と考えている力が身につけているかどうかの自己評価を行うことが大事であると考え。どの教科を通して、身につけたい力を確認して授業を行なったのは初めてだったので、少なからず児童は自信を持っていたと考える。

### (課題)

○まとめをより「汎用的」に行い、それに着目する良さや価値を子ども達から引き出す必要がある。

○「身につけたい力」が身についたら、どんなところで使えそうかという見通しを持たせる場や振り返り等を設定するとさらに児童の意欲や自身につながる。



- 学期はじめにこの形で授業に慣れさせ、2学期、3学期は内容を前景化させ、その中でどのような方法、読み方を生かしたか、どう考えたかを理由として交流できるように授業を展開していく。
- 「身につけた力」を発揮する「リーフレット」等を作成する際、学力が下位の子たちには、作品を読みきれない場面が見られた。その支援を具体化する必要がある。

**[引用文献]**

奈須正裕 2017 『「資質・能力」と学びのメカニズム』